
「道の駅＋天神東公園」 再整備基本計画（案）

令和8年7月 吉岡町建設課、産業観光課

〔1〕 天神東公園

1 再整備の基本的な考え方

1) 隣接する道の駅への貢献として求められること

道の駅は「町民のための便利施設」であると同時に、町外からの利用者を集めてお金を使っていたり「外貨獲得施設」でもあり、さらに吉岡町を知り、町のイメージを高め、町をめぐるきっかけを道の駅訪問者に与える「地域戦略上のハブ施設」でもあるなど、大変重要な施設である。

したがって、現状のような道の駅との関係を考えない、公園だけで自己完結するような公園整備構想ではなく、天神東公園は「道の駅をサポート施設」として、道の駅を魅力的にするために、道の駅との関係を重視して整備を考える。

2) 本公園に求められること

- ① 魅力をつくること(楽しそうで誰もが行ってみたいくなるようにすること)
- ② 多くの人に使われるようにすること(道の駅の利用者を誘っているようにすること)
- ③ 道の駅の集客と売上げアップにも貢献すること、
(変化に富む空間と景観、おしゃれなカフェなどがあって滞在時間が自然と延びるようにすること)

3) 現状の問題点

① 単調な空間

現状は、「平坦でほぼ高低差がなく」、その結果「空間にメリハリがなく」、単調でつまらない

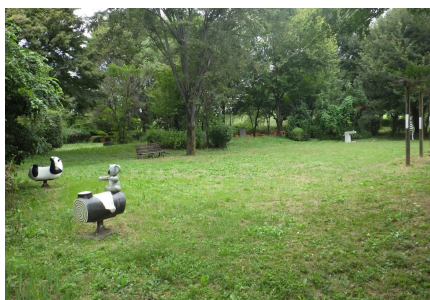


写真1 全体が平坦で単調な公園



写真2 樹木が多すぎて中が見通せない公園

② 樹木が多すぎて中が見通せない天神東公園

「樹木が多過ぎ」、ほとんど見通せない。まるで、入ってくるかと「木が人を拒んでいる」ようである。

③ 滞在できない空間

「ゆっくりくつろいで、滞在できる」ということは公園の楽しさに欠かせないが、ベンチなどの着座装置が少ないだけでなく、人が休む「場(スペース)」が作られていない。

2 再整備基本計画

1) 基本方針

「誰もが行ってみたいくなり、滞在時間も極力長くなるようにする」ことを目標に、築山と池という地形をしっかりと作り、植栽を不用意に入れず、飲食と居心地よさを提供する施設を置き、全体の空間と景観を緻密に作り上げ、道の駅とも連携させることを、基本方針とする。

2) 基本計画

① 起伏のある地形をつくる

地形をしっかりと作り込み、公園全体を丁寧に作り込まれた起伏ある地形・築山で構成する。人は、「誘わない」平らな地形は魅力がないと認識し、人を「誘う」築山、起伏のある地形は魅力的と認識する。

② 築山に合わせて水面をつくる

良い公園にするために、築山とセットで池を作ることが合理的で、かつ大きく魅力を高めることになる。※水深は、幼児がうつぶせに倒れても溺れない10cmまでとする。



写真3 築山も池も魅力だが、セットで作るとより魅力に。安全な浅い池。

③ みどり・樹木は安易に植えない

見通しを妨げ、人を拒む力が強い植栽は、小さくせず長くもしない。良い公園にするために植物を雑にたくさん植えない。

④ 豊かな休憩スペース・ベンチを中心に据えて公園全体を組み立てる

公園の主役は「人」。もっとも大事なことは、「人を誘い、招き、居心地よくして、楽しませること」であり、「休憩スペース・ベンチ」が不可欠である。これらがあると公園は魅力的になる。

⑤ 飲食と居心地よい空間を提供するサポート施設を入れる。

良い公園には魅力的な飲食施設が欠かせない。魅力的な飲食施設は公園の魅力を高めると同時に、集客して利益を上げ公園管理を健全にするためでもある。

⑥ 地形に合わせた遊具を設置する

子どもが楽しく遊ぶ姿はそれ自体が公園の大きな魅力となる。また、子どもには大人がついてくる場合が多いので、子どもが行きたい公園には大人も大勢来る。

良い公園にするために、空間を邪魔せず、空間を活かす魅力的な遊具を入れる。

〔 2 〕 道の駅よしおか温泉

1 現状の問題点と再整備の目的

①本道の駅の一番の問題は、「建物が点在したレイアウトのため、魅力的な空間が作られていないこと」「建物自体も堅い壁で囲われて魅力が不足していること」に起因している。

集客・売上は、通常、道の駅の見た目に比例するので、空間・建物の魅力のなさを改善し、空間の魅力を作り、集客・売上をアップさせることが再整備の目的である。



写真4 建物が駐車場に対し壁を向けている「物産館 かざぐるま」
（「人を拒む形」であり、人が来る形ではない。）



写真5 奥に引っ込んでいて誘う形になっていないレストラン和(なごみ)（公園に背を向けている）

②道の駅の利用者に公園を利用してもらうことは、道の駅での滞在時間を延ばすことにつながり、売り上げアップを担える。

しかし、本道の駅は「公園に背を向けている」ため、仮に公園が良くなっても、公園に道の駅利用者を誘うことはこのままでは難しい。また、公園側に背を向けているだけでなく、公園へのアクセス路も人を誘うように作られていない。

道の駅の利用者の多くを隣接する公園に誘い両施設で相乗効果を生むような空間の整備がもうひとつの目的である。

2 基本的な考え方

1) 増築による魅力的な空間づくり

建て替えずに丁寧な空間を作りながら、壁に囲われた建物の硬さを改善するために、目立つ位置に新たな建物を増築する。

現状は平行・直行によって機械的に建物を並べているため、空間が作られていない。特に、「物産館」と「温泉棟」の間、道の駅の敷地のほぼ中央に約6m幅の車道があり、これが両者を分断し、空間が作れていない大きな要因となっている。

そこで、ここに、両者をつなぐように、そしてお客様側(駐車場側)に顔を向けるように、既存建物に平行・直行ではなく、ななめに増築する。これによって空間の魅力を大きく作ることができる。

駐車場からレストランはあまり目立たず、入り口も入りにくく、あるのか無いのかわかりにくいので、その改善も狙う。

また、道の駅利用者を、公園に誘うエントランスとしての機能をもたせる。



写真6 物産館と温泉施設の間の「増築予定箇所」

2) 誘う建物

建物はお客様をよく誘うように、前側は全面ガラスにして店内がよく見えるようにする。

そして、「中がよく見える」ことを活かすため、中は特別におしゃれに、かつ人を誘うようにする。うまく並べた商品は人をよく誘うので、魅力を作ると同時に売上アップを目指す。

また、木柱を並べ、柱は梁でつなぎ、柱も梁も同断面として、圧倒的な木のボリュームで人を誘う。

3) 外構の充実

集客に大きな影響を及ぼすのは建物と同時に外構である。外構はよく見えるので、ここが人を誘うように見え、おしゃれで楽しそうであれば、それは集客に確実にプラスとなる。

建物の延長で、柱は梁でつなぎ、建物の木のボリュームがそのままパーゴラ風に外構に続いているようにする。

外構はウッドデッキとし、駐車場側から3段のステップを前面に付け、その階段には駐車場からよく見えるように間接光を入れる。
